

琉球大学学術リポジトリ

学業達成に関する縦断的研究1： 親が認知した児童の入学前発達と学校生活能力

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-09-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前原, 武子, 嘉数, 朝子, 桐木, 建始, 新里, 里春, 名城, 嗣明, 玉村, 弥堅, 當山, 利道, 玉城, きみ子, 仲地, 重夫, 徳永, 信太郎, Maehara, Takeko, Kakazu, Tomoko, Kiriki, Kenshi, Shinzato, Rishun, Nashiro, Shimei, Tamamura, Yaken, Toyama, Toshimichi, Tamaki, Kimiko, Nakachi, Shigeo, Tokunaga, Shintaro メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/1865 |

学業達成に関する縦断的研究 1

—— 親が認知した児童の入学前発達と学校生活能力 ——

前原武子* 嘉数朝子* 桐木建始* 新里里春* 名城嗣明*
玉村弥堅** 當山利道** 玉城きみ子** 仲地重夫** 徳永信太郎**

A Longitudinal Study of School Achievement-1: The Developmental Level of Preschool Period and School Adjustment Perceived by Parents.

Takeko MAEHARA, Tomoko KAKAZU, Kenshi KIRIKI, Rishun SHINZATO,
Shimei NASHIRO, Yaken TAMAMURA, Toshimichi TOYAMA,
Kimiko TAMAKI, Shigeo NAKACHI, Shintaro TOKUNAGA
(Received Nov. 30, 1987)

本研究は、学業達成に関する縦断的研究の中で行われた一研究の報告である。従来の学業成績に関する心理学的研究は、学業成績に影響する諸要因を見出すことに大きな努力を払ってきた(清水, 1969)。さらに、最近の研究(樋口ら, 1983)は、パス係数を算出することによって、学業成績を規定する要因の方向性を明かにする試みを行っている。

しかしながら、学業成績とその規定要因の関連性を理解するためには、さらに次の問題点の解明に方向づけられた研究が必要であろう。その第1は、どの要因がどの学年でより強い影響力をもつかが明らかにされなければならない。学業成績を規定する要因の中には、学年をこえて一貫して強い影響力をもつものや、学年によって異なる影響度を示すものがあると思われるからである。第2に、学業成績が性役割期待と関連することから(小橋川, 1969)、第1の問題点を検討する際には性差を考慮しなければならない。第3の問題点は個人差の理解に関することである。学年によって学業成績が変化しない児童や、上昇する児童、あるいは下降する児童が

いるが、そのような個人差を規定する要因を明らかにするための縦断的研究が必要である。第4に、学業成績を研究することのねらいは、基礎学力の向上だけにとどまるのではなく、子どもが主体的に学業達成への努力を払うことができるように、その意欲と能力の育成を目標とするべきである。

特に第4の指摘は、White (1959)によるコンピテンス (competence) 理論を重視するものである。有効性動機づけ (effectance motivation) すなわち自分にできるとか、わかるというような自己の有効性感情の満足を求めるために、主体的に問題解決の努力を払う能力を意味するコンピテンスは、人間の主体的生き方にかかわる重要な能力であると思われる。ところが学業成績の優れた者の中には自己有効性動機づけの高い者だけでなく低い者もあり(前原, 1987)、したがってコンピテンスの育成を度外視して学業成績の向上だけを意図する教育のあり方は適切でない。

以上の問題解決へ接近するために、本研究を含む一連の研究が計画された。その基本的研究課題は、コンピテンスの発達過程と学業成績の関連性を検討することである。そのためにコンピテンスの発達にとって敏感な時期である小学校入学から中学校卒業までの9年間において、

*Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.

**Laboratory School, Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.

コンピテンスの発達に貢献する諸要因—児童の既有知識や技能、児童の自己管理能力、家庭および教師要因などがどのように機能するかについて検討する。

本研究は、次年度以降における研究変数との関連性を検討するために、一般的知的能力、入学前における発達の特徴、および学校生活能力についての親の予想を取り上げて、小学校入学初期における特徴を明らかにしようとするものである。

方 法

1. 一般的知的能力の測定

自画像および樹木画の描画法を用いて知的能力を測定した。自画像の描画は、「自分の絵をかいてください。体を全部かいてください。」の指示によって、また樹木画の描画は、「実のなる木を1本かいてください。」の指示によって一斉に実施した。いずれも白紙A4判を縦長に使用し、20分間で、学級担任が一斉に実施した。

自画像の得点化は、グッドイナフ人物知能検査の得点項目中、女子の得点化に該当しない項目を除いた35項目をもとにして行われた。また樹木画は、山下(1982)にもとづいて、幹と樹冠の比率、樹冠の左右の比率を得点として使用した。

2. 入学前発達の測定

入学前の発達特徴を測定するために、幼児期における知的能力および社会的能力を示す30項目からなる尺度を構成した。各項目について、入学前に達成されていたか否かの2件法によって、母親に応答を求めた。それらの項目は表1に示すとおりである。

3. 学校生活についての予想

子どもが学校生活(低学年の間)を楽しみながら、さまざまな課題に効果的に対処していくことができるかどうかについての予想を調べるために、付表に示す18項目からなる尺度が構成された。各項目について、母親は自分の子どもが成功するか、失敗するか、予測不可能かのい

ずれかで応答が求められた。

4. 学業成績についての母親の原因帰属

低学年における学業成績の成功および失敗の原因について、「教師や学校の指導力」、「親や家族の配慮」、「子ども本人の努力」、「子ども本人の素質、能力」、「友人との関係」の5帰属因の順位づけを母親に求めた。

5. 被験者

沖縄県琉球大学付属小学校1年生120名(男女各60) およびその母親であった。

6. 調査時期：1987年6月。

結果と考察

1. 母親が認知した入学前発達について

表1は尺度の項目とともに、各項目の反応比率(%)を示したものである。表1から、ほとんどの項目において発達を肯定する回答が多くみられることがわかる。項目番号3, 4, 14, 15, 22, 29, 30は「はい」の回答を逆転し、発達を肯定する得点とする。その合計点(30点満点)を算出したところ、平均値は22.10であった。

次に、数量化Ⅲ類による項目分析を行った。その結果、表2に示すとおり、意味のあると思われる3つの軸が抽出された。第1軸の数値が高い項目は、「誕生日の月日をいえた」、「ひらがなを全部読めた」、「簡単な本なら一人で読み通せた」、「自分で本を読んだり、絵を書いたりする方」、「ひらがなを全部書けた」、「簡単な計算ができた」、「特に親が教えたりしなくても、いつの間にか字などを覚えていた」、「自分の家の住所を正確にいえた」の8項目であった。これらの項目の内容は、知的な発達に関連するものである。そこで、第1軸を『知的特性』の軸と命名する。第2軸に高い数値を示した項目は「他人に分かるように話す」、「友達が多い方」、「我慢強い方」、「凝り性」、「自分で機嫌を直す」、「難しいことはやりたがらない」、「ものおじする方」の7項目であった。これらの項目内容から、第2軸は社会性や情緒の安定性に関連した軸と解

表 1 母親が認知した入学前発達項目の反応比率 (%)

| 項 目 内 容 | は い 1 | いいえ 2 | 無答 |
|--------------------------------------|----------|----------|-----|
| 1. 友達とよく遊ぶ方だった | 94.2 | 5.8 | 0.0 |
| 2. 友達が多い方であった | 79.2 | 20.8 | 0.0 |
| 3. 自分から友達の中にはいっていけない子だった (-) | 15.0 | 85.0 | 0.0 |
| 4. 友達と遊ぶときは、たいてい友達のいいなりになる方だった (-) | 17.5 | 81.7 | 0.8 |
| 5. 自分の誕生日の月日を正確にいえ | 91.7 | 8.3 | 0.0 |
| 6. 自分の家の住所を正確にいえ | 70.0 | 30.0 | 0.0 |
| 7. ひらがなを全部読めた | 85.8 | 13.3 | 0.8 |
| 8. ひらがなを全部書けた | 65.0 | 35.0 | 0.0 |
| 9. 子ども用の簡単な本なら一人で読み通すことができた | 79.2 | 20.8 | 0.0 |
| 10. 簡単な計算ができた | 77.5 | 22.5 | 0.0 |
| 11. 経験したことを他人に分かるように話すことができた | 84.2 | 15.0 | 0.8 |
| 12. 幼稚園などの様子を親によく話す方であった | 79.2 | 20.8 | 0.0 |
| 13. 他人が話す時は落ち着いてよく聞く方だった | 61.7 | 38.3 | 0.0 |
| 14. 新しい事をする時は、ものおじする方だった (-) | 44.2 | 55.8 | 0.0 |
| 15. 少しでも難しいことは、やりたがらない方だった (-) | 32.5 | 67.5 | 0.0 |
| 16. 興味があることには凝り性であった | 85.0 | 15.0 | 0.0 |
| 17. 特に親が教えなくても、いつのまにか字などを覚えていた | 80.8 | 19.2 | 0.0 |
| 18. 親がついていなくても自分で本を読んだり、絵をかいたりする方だった | 86.7 | 13.3 | 0.0 |
| 19. 競争に負けると、とてもくやしがる方だった | 55.8 | 43.3 | 0.8 |
| 20. 我慢強い方だった | 61.7 | 37.5 | 0.8 |
| 21. いつまでも怒ってないで、自分で機嫌を直すのが上手だった | 65.8 | 33.3 | 0.8 |
| 22. おねしょをよくもらす方だった (-) | 18.3 | 80.8 | 0.8 |
| 23. 一人で用便の始末がきちんとできる方だった | 92.5 | 7.5 | 0.0 |
| 24. 衣服の着脱は自分できちんとできる方だった | 91.7 | 8.3 | 0.0 |
| 25. 前もってでかける準備を自分でする方だった | 59.2 | 40.8 | 0.0 |
| 26. 道路の横断は信号をみて一人で渡らせていた | 57.5 | 42.5 | 0.0 |
| 27. 近所の店に一人でおつかいに行かせていた | 72.5 | 27.5 | 0.0 |
| 28. 偏食はなく、なんでも食べる方だった | 53.5 | 45.8 | 0.8 |
| 29. 食事に時間がかかりすぎるほうだった (-) | 61.7 | 37.5 | 0.8 |
| 30. よくケガをする方だった (-) | 28.3 | 71.7 | 0.0 |

(-) 印の項目は採点にあたって逆転の必要な項目を示す

表 2 就学前の発達質問紙における各項目のカテゴリー数値 (数量化Ⅲ類)

| 項 目 | カテゴリー | 1 軸 | 2 軸 | 3 軸 |
|--------------------------------------|-------|--------|--------|--------|
| 5. 自分の誕生日の月日を正確にいえ | は い | -0.525 | 0.104 | 0.139 |
| | いいえ | 5.455 | -1.086 | -1.447 |
| 9. ひらがなを全部読めた | は い | -0.806 | 0.447 | 0.134 |
| | いいえ | 4.934 | -2.740 | -0.818 |
| 7. 子ども用の簡単な本なら一人で読み通すことができた | は い | -1.136 | 0.383 | -0.292 |
| | いいえ | 4.043 | -1.364 | 1.039 |
| 18. 親がついていなくても自分で本を読んだり、絵をかいたりする方だった | は い | -0.568 | 0.425 | 0.019 |
| | いいえ | 3.480 | -2.603 | -0.116 |
| 8. ひらがなを全部書けた | は い | -1.477 | 0.714 | -0.158 |
| | いいえ | 2.733 | -1.320 | 0.293 |
| 10. 簡単な計算ができた | は い | -0.763 | 0.059 | -0.114 |
| | いいえ | 2.582 | -0.198 | 0.384 |
| 17. 特に親が教えなくても、いつのまにか字などを覚えていた | は い | -0.651 | 0.141 | 0.274 |
| | いいえ | 2.575 | -0.557 | -1.083 |
| 6. 自分の家の住所を正確にいえ | は い | -0.976 | -0.025 | -0.425 |
| | いいえ | 2.113 | 0.054 | 0.921 |
| 11. 経験したことを他人に分かるように話すことができた | は い | -0.452 | -0.737 | -0.308 |
| | いいえ | 2.407 | 3.932 | 1.644 |
| 2. 友達が多い方であった | は い | -0.354 | -0.962 | 0.661 |
| | いいえ | 1.327 | 3.606 | -2.479 |
| 20. 我慢強い方だった | は い | 0.050 | -1.321 | -1.373 |
| | いいえ | -0.081 | 2.102 | 2.184 |
| 16. 興味があることには凝り性であった | は い | -0.054 | -0.324 | -0.201 |
| | いいえ | 0.332 | 1.982 | 1.232 |
| 21. いつまでも怒ってないで、自分で機嫌を直すのが上手だった | は い | 0.058 | -0.981 | 0.108 |
| | いいえ | -0.116 | 1.962 | -0.216 |
| 15. 少しでも難しいことは、やりたがらない方だった | は い | 1.494 | 1.856 | 1.051 |
| | いいえ | -0.777 | -0.965 | -0.547 |
| 14. 新しい事をする時は、ものおじする方だった | は い | 0.587 | 1.837 | -0.232 |
| | いいえ | -0.476 | -1.487 | 0.187 |
| 1. 友達とよく遊ぶ方だった | は い | -0.038 | -0.203 | 0.554 |
| | いいえ | 0.575 | 3.101 | -8.470 |
| 24. 衣服の着脱は自分できちんとできる方だった | は い | -0.051 | 0.071 | -0.431 |
| | いいえ | 0.527 | -0.737 | 4.476 |
| 3. 自分から友達の中にはいっていけない子だった | は い | 1.417 | 3.501 | -4.361 |
| | いいえ | -0.249 | -0.614 | 0.764 |
| 23. 一人で用便の始末がきちんとできる方だった | は い | -0.097 | 0.070 | -0.264 |
| | いいえ | 1.282 | -0.924 | 3.498 |

| | | | | |
|--------------------------------|----------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 4. 友達と遊ぶときは、たいてい友達のいいなりになる方だった | は い いいえ | 1.834 -0.414 | 1.675 -0.378 | -3.475 0.785 |
| 25. 前もってでかける準備を自分でする方だった | は い いいえ | -0.379 0.520 | -0.675 0.928 | -1.568 2.155 |
| 13. 他人が話す時は落ち着いてよく聞く方だった | は い いいえ | -0.639 1.055 | -0.425 0.702 | -1.212 2.002 |
| 12. 幼稚園などの様子を親によく話す方だった | は い いいえ | -0.464 1.651 | -0.400 1.424 | 0.054 -0.191 |
| 19. 競争に負けると、とてもくやしがる方だった | は い いいえ | -0.514 0.635 | -1.103 1.362 | 0.205 -0.253 |
| 22. おねしょをよくもらす方だった | は い いいえ | 0.832 -0.199 | -1.846 0.441 | -1.197 0.286 |
| 26. 道路の横断は信号をみて一人で渡らせていた | は い いいえ | 0.134 -0.179 | -0.321 0.425 | -0.486 0.645 |
| 27. 近所の店に一人でおつかいに行かせていた | は い いいえ | 0.022 -0.055 | -0.500 1.228 | -0.503 1.235 |
| 28. 偏食はなく、なんでも食べる方だった | は い いいえ | 0.214 -0.255 | -0.721 0.860 | -1.048 1.250 |
| 29. 食事に時間がかかりすぎるほうだった | は い いいえ | -0.152 0.260 | 0.777 -1.332 | -0.417 0.715 |
| 30. よくケガをする方だった | は い いいえ | 0.816 -0.362 | 0.226 -0.100 | -0.705 0.312 |
| | 相関係数 寄与率(%) | 0.353 12.454 | 0.305 9.321 | 0.303 9.205 |

注) 番号は項目番号を示す

積されるため、「社会性」の軸と命名する。次に、第3軸をみると、「友達とよく遊ぶ」、「衣服の着脱」、「自分から友達の中にはいっていけない」、「用便の始末」、「友達のいいなりになる」、「前もってでかける準備をする」、「他人の話を落ち着いて聞く」の7項目に数値が高い。そこでこの軸を『自律性』の軸と命名する。

いずれの軸とも関連の低い項目は30項目中8項目であった。これらの8項目をのぞいた22項目(22点滴点)を入学前発達尺度として、以下の分析に使用することにする。

数量化Ⅲ類で抽出された3つの軸(下位尺度)に含まれる項目についての全体-部分相関係数を算出したところ、表3に示す結果となった。これによれば、項目1に.27の低い値がみられる

が、全体的に高い相関を示しており、各下位尺度の内的整合性が確認された。そこで、各下位尺度に含まれる項目の得点を合計したものを、個人の得点として使用することができる。次に、3つの下位尺度間の相関係数を算出したところ、「知的特性」は「社会性」との間に.133と低い値を示したが、「自律性」とは.255の有意な相関($p < .05$)を示し、一方「社会性」は「自律性」との間に.382の有意な相関($p < .01$)を示した。これらのことから、3つの下位尺度は必ずしも相互に独立とはいえ、この制限の中で今後下位尺度についての解釈を行う必要がある。

表 3 入学前発達尺度の各下位尺度項目と各項目の全体-部分相関係数

| 知的特性 | | 社会性 | | 自律性 | |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 項目 | 係数 | 項目 | 係数 | 項目 | 係数 |
| 9 | .81 | 15 | .68 | 25 | .57 |
| 8 | .77 | 11 | .62 | 13 | .50 |
| 7 | .74 | 14 | .58 | 4 | .48 |
| 5 | .58 | 20 | .56 | 3 | .45 |
| 18 | .57 | 21 | .52 | 24 | .41 |
| 10 | .55 | 2 | .50 | 23 | .39 |
| 6 | .52 | 16 | .44 | 1 | .27 |
| 17 | .51 | | | | |

2. 描画における知的得点

自画像における発達得点、ならびに樹木画における各測定値の平均値および標準偏差を表 4 に示す。入学前発達との関係を見るために、「知的特性」、「社会性」、「自律性」の得点と描画における各得点との相関係数を算出したところ、いずれにおいても有意な相関は見られなかった。

3. 学校生活についての親の予想

尺度の各項目についての反応比率 (%) を表 5 に示した。この表から、母親は、自分の子ど

表 4 描画における各測定値の平均と標準偏差

| | 自画像 | 樹 木 画 | | | | | |
|----|-------|--------|----------|-----------|-----------|-----------|----------------|
| | | 発達得点 | 幹の高さ(mm) | 樹冠の高さ(mm) | 樹冠の右幅(mm) | 樹冠の左幅(mm) | 幹の高さ/ 樹冠の高さ |
| X | 17.97 | 139.81 | 102.70 | 57.60 | 52.51 | 1.65 | 1.17 |
| SD | 3.33 | 45.13 | 38.38 | 20.11 | 19.90 | 0.99 | 0.38 |
| N | 120 | 108 | 108 | 108 | 108 | 108 | 108 |

表 5 母親による学業生活の予想反応の比率 (%)

| No | 項 目 | 失敗 | 成功 | ? | 無答 |
|----|-------------------|------|------|------|-----|
| 1 | 危険な遊びやひどい悪ふざけは? | 30.0 | 28.3 | 40.8 | 0.8 |
| 2 | 朝の起床や登校の準備は? | 38.3 | 52.5 | 9.2 | 0.0 |
| 3 | 担任教師との相性は? | 0.0 | 83.3 | 16.7 | 0.0 |
| 4 | 学校に行く気分は? | 0.8 | 85.8 | 13.3 | 0.0 |
| 5 | 教師からの評価は? | 0.8 | 65.8 | 32.5 | 0.8 |
| 6 | いじめの問題は? | 0.0 | 38.3 | 56.7 | 0.0 |
| 7 | 学校での子どもの様子は? | 29.2 | 68.3 | 2.5 | 0.0 |
| 8 | 仲良しの友達ができるか? | 11.7 | 75.8 | 12.5 | 0.0 |
| 9 | 学校から帰ってやるべきことは? | 12.5 | 77.5 | 9.2 | 0.8 |
| 10 | クラスのリーダーになれるか? | 30.0 | 23.3 | 46.7 | 0.0 |
| 11 | 勉強でトップクラスに入れるか? | 10.8 | 30.8 | 58.3 | 0.0 |
| 12 | 教師のいいつけを守ることは? | 8.3 | 81.7 | 10.0 | 0.0 |
| 13 | 勉強でのいわゆる「落ちこぼれ」は? | 10.0 | 55.8 | 34.2 | 0.0 |
| 14 | 先生の話落ち着いてきくことは? | 15.0 | 54.2 | 30.8 | 0.0 |
| 15 | 新しいことや困難なことには? | 15.0 | 56.7 | 28.3 | 0.0 |
| 16 | 感情のコントロールは? | 28.3 | 55.0 | 15.8 | 0.8 |
| 17 | 自分の考えや意見は? | 30.0 | 53.3 | 16.7 | 0.0 |
| 18 | 級友とけんかした後の仲直りは? | 7.5 | 64.2 | 28.3 | 0.0 |

もが低学年学校生活における多くの課題について失敗するというより、むしろ効果的、成功的に処理できると予想する傾向を示すことがわかる。中でも、「教師との相性」、「教師からの評価」、「学校へいく気分」、「友達ができる」、などはほとんどの親が成功を予想している。しかし、課題によっては予想がつかない（分からない）ものもあり、「いじめ」や「勉強でトップクラスになれる」などについては、多くの親がどうなるかわからないと回答している。

4. 入学前発達と学校生活の予想得点との関連

母親が認知した入学前発達尺度の下位尺度ごとに、高得点群（H群）と低得点群（L群）に被験者を分類した。「知的特性」においては8点をH群、4点以下をL群とし、「社会性」においては7点をH群、3点以下をL群とし、「自律性」では7点をH群、4点以下をL群とした。各下位尺度のH群とL群別に、学校生活についての母親の予想から、失敗得点、成功得点、分からない得点（それぞれの予想反応の合計）を算出した。その結果を表6に示す。この結果をみると、入学前発達の低得点群すべてにおいて、得点の高い群が低い群より学校生活の成功予想が多いのに対し、逆に入学前発達得点の低い群は高い群より多くの失敗を予想することが分かる。

以上の結果から、入学前の発達についての親の認知が、子どもの入学後の学校生活についての親の認知をかなり強く規定していることが分かる。しかし逆に親が子どもの将来の予想をすることによって、子どもの過去の認知にバイアスが生じた可能性も否定できない。

表6 入学前発達と学校生活能力の予想

| 予想 | 入学前発達 | | L | H | t (df) | p |
|-------------------------|--------------------|-----------|------|-------|---------------|-------|
| 失敗 予想 得点 | I 知 性 | \bar{X} | 3.96 | 2.26 | 2.935 (70) | <.005 |
| | | SD | 2.50 | 2.09 | | |
| | | N | 22 | 50 | | |
| | II 社 会 性 | \bar{X} | 4.08 | 1.57 | 3.908 (44) | <.001 |
| | | SD | 2.68 | 1.50 | | |
| | | N | 25 | 21 | | |
| | III 自 律 性 | \bar{X} | 4.20 | 1.39 | 4.385 (51) | <.001 |
| | | SD | 2.56 | 1.43 | | |
| | | N | 20 | 33 | | |
| 成功 予想 得点 | I 知 性 | \bar{X} | 9.18 | 11.42 | 2.490 (70) | <.05 |
| | | SD | 3.39 | 3.49 | | |
| | | N | 22 | 50 | | |
| | II 社 会 性 | \bar{X} | 8.00 | 12.91 | 4.696 (44) | <.001 |
| | | SD | 3.71 | 3.12 | | |
| | | N | 25 | 21 | | |
| | III 自 律 性 | \bar{X} | 9.45 | 12.61 | 3.439 (51) | <.005 |
| | | SD | 3.41 | 3.02 | | |
| | | N | 20 | 33 | | |
| 分か ら ない 得 点 | I 知 性 | \bar{X} | 4.82 | 4.30 | 0.749 (70) | n.s. |
| | | SD | 2.69 | 2.66 | | |
| | | N | 22 | 50 | | |
| | II 社 会 性 | \bar{X} | 5.92 | 3.43 | 3.262 (44) | <.005 |
| | | SD | 2.30 | 2.77 | | |
| | | N | 25 | 21 | | |
| | III 自 律 性 | \bar{X} | 4.35 | 3.97 | 0.536 (51) | n.s. |
| | | SD | 2.50 | 2.43 | | |
| | | N | 20 | 33 | | |

5. 学業成績の原因帰属について

表7は、5つの原因帰属因についての順位の中央値を示したものである。低学年において学業成績が優れる場合の原因として、1位「教師の指導力」、2位「親の配慮」、3位「本人の努力」、4位「本人の能力」、5位「友人関係」の順で親は認知している。学業成績の劣る場合の原因は、順位が入れかわり、「教師の指導力」が後退して3位に位置づけられている。

表7 母親が認知した学業成績の原因帰属（中央値）

| 原因帰属 | 優れる場合 | 劣る場合 |
|-------------|-------|------|
| 教師や学校の指導力 | 2.01 | 3.10 |
| 親や家族の配慮 | 2.07 | 1.74 |
| 子ども本人の努力 | 2.77 | 2.24 |
| 子ども本人の素質、能力 | 3.59 | 3.43 |
| 友人との関係 | 4.80 | 4.75 |

表 8 学業成績成功の予想における入学前発達の高低群間の比較 (中央値)

| 入学前発達尺度 | | 知的特性 | | | | 社会性 | | | | 自律性 | | | |
|------------|--------------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|-------|------|
| | | 成功の場合 | | 失敗の場合 | | 成功の場合 | | 失敗の場合 | | 成功の場合 | | 失敗の場合 | |
| 入学後の発達の高低群 | | L | H | L | H | L | H | L | H | L | H | L | H |
| 原因帰属 | 教師や学校の指導力 | 1.90 | 1.95 | 3.50 | 2.93 | 2.18 | 2.04 | 3.00 | 3.06 | 1.90 | 2.03 | 3.83 | 2.75 |
| | 親や家族の配慮 | 2.25 | 2.50 | 1.83 | 1.77 | 1.60 | 1.67 | 1.60 | 1.45 | 2.25 | 1.92 | 2.00 | 1.56 |
| | 子ども本人の努力 | 2.75 | 2.68 | 2.13 | 2.21 | 2.75 | 3.00 | 2.69 | 2.05 | 2.50 | 2.77 | 2.25 | 2.45 |
| | 子ども本人の素質, 能力 | 3.50 | 3.83 | 3.21 | 3.69 | 2.86 | 3.14 | 3.14 | 3.42 | 3.63 | 3.62 | 2.88 | 3.63 |
| | 友人との関係 | 4.77 | 4.76 | 4.50 | 4.74 | 4.67 | 4.92 | 4.54 | 4.80 | 4.79 | 4.87 | 4.59 | 4.84 |

東と柏木 (1981) は、日本と米国の幼児をもつ親に対して、子どもの学業成績の原因帰属を尋ねた結果、日本の親は、子どもの素質的な能力に最も強く帰属する傾向にあることを見出した。本研究結果は、この結果とは異なることが分かる。

6. 入学前発達と学業成績の原因帰属

表 8 は、入学前発達の H 群と L 群別に学業成績の原因帰属についての順位の中央値を示すものである。この表によると、H 群と L 群の違いはほとんどみられず、わずかに「自律性」下位尺度の H 群と L 群で必要な原因帰属の順位に入れ替えがみられる。

7. まとめ

本研究の結果から、子どもの入学前の発達特徴についての親の認知が学校生活能力についての親の認知と関連すること、親が自分の子どもの学校生活能力を高く認知すること、学業成績の原因として、親は教師や親の配慮を強く認知することなどが分かった。一方、知的発達の客観的指標として描画による分析を用いたが、これらの得点と親が認知する入学前発達得点との間には明確な相関関係は見出されなかった。これらの特徴が、学年の進行とともに学業成績とどのように関連するかを検討することが今後の課題である。

引用文献

樋口一辰・鎌倉雅彦・大塚雄作 1983 児童の学業達成に関する原因モデル。教育心理学研究, 31, 18-27.

小橋川慧 1969 性差と性役割の獲得。桂広介他編 児童心理学講座 8 巻 「人格の発達」 金子書房。pp137-184.
 小林重雄 1977 グッドイナフ人物知能検査ハンドブック。三京房。
 前原武子 1987 有効性動機尺度による原因帰属の予測性。琉球大学教育学部紀要, 第30集, 第2部, 333-346.
 清水利信 1969 学力構造の心理学。金子書房。
 White, R.W. 1959 Motivation reconsidered: The concept of competence. *Psychological Review*, 66, 297-333.
 山下真理子 1982 バウムテストの発達の研究。教育心理学研究, 30, 23-28.

<付 表>

母親による学校生活の予想を調べる質問紙

- 危険な遊びやひどい悪ふざけは？
 A 心配だ
 B うちの子は大丈夫
 C なんともいえない
- 朝の起床や登校の準備は？
 A ぐずぐずすることが多いと思う
 B 一人でさっさとできると思う
 C どうなるか分からない
- 担任教師との相性は？
 A よくないような気がする
 B いいほうだと思う
 C 分からない
- 学校に行く気分は？
 A いやいやながら行くことが多いと思う

- B楽しんで行くことが多いと思う
C今はなんとも言えない
5. 教師からの評価は？
A 実際以上に悪く見られそう
B 適切に評価されるだろう
C どうなるか分からない
6. いじめの問題は？
A 親子で悩むことになるかもしれない
B うちの子は大丈夫だと思う
C 今は分からない
7. 学校での子どもの様子は？
A たいてい親が聞き出さないと話さないだろう
B たいてい子どもの方から話してくれるだろう
C どうなるか分からない
8. 仲良しの友達ができるか？
A 友達をつくるのは下手だと思う
B たくさんできると思う
C どうなるか分からない
9. 学校から帰ってやるべきことは？
A 一人ではやれないだろう
B 一人でやれると思う
C どうなるか分からない
10. クラスのリーダーになれるか？
A 無理だと思う
B なれると思う
C どうなるか分からない
11. 勉強でトップクラスに入れるか？
A 無理だと思う
B かなりいいところまでいくと思う
C どうなるか分からない
12. 教師のいいつけを守ることは？
A すこしむずかしいと思う
B よく守るほうだと思う
C どうなるか分からない
13. 勉強でのいわゆる「落ちこぼれ」は？
A 心配だ
B 心配ない
C どうなるか分からない
14. 先生の話の落ち着いた聞くことは？
A すこしむずかしいと思う
B うちの子は大丈夫だと思う
C どうなるか分からない
15. 新しいことや困難なことには？
A 自分で取り組むのは無理だろう
B 自分で取り組むと思う
C どうなるか分からない
16. 感情のコントロールは？
A すぐ怒ったり、泣いたりしそう
B がまん強いほうだと思う
C どうなるか分からない
17. 自分の考えや意見は？
A はっきり言えないほうだと思う
B はっきり言うほうだと思う
C どうなるか分からない
18. 級友とけんかをした後の仲なおりは？
A 自分からするのはむずかしいだろう
B 自分から上手にできるだろう
C どうなるか分からない
-